

茶の湯 文化学会 会報

第109号 / 2021年6月28日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

佐保姫壺は沢姫壺か

中村修也

最近、淡交社から新しいシリーズとして『茶書古典集成』が刊行され始めた。再び茶の湯史料についてどのように扱うかが問題になってきているというところである。たとえば、『宗湛日記』天正十五年十月二十二日昼の木村屋宗二の茶会に「さほひめ大壺」が登場している。客は宗湛一人であった。場所は大坂の天満である。

この『宗湛日記』の記述を信用する限りにおいては、佐保姫大壺の所有は木村屋宗二ということになる。しかし、佐保姫大壺と沢姫大壺が同一であるならば、これはおかしなことになる。なぜならば、沢姫大壺は、天正十二年三月二十六日付の尾藤甚右衛門宛森武蔵守長可遺言状（名古屋博物館

蔵）に、「澤姫の壺、秀吉様へ進上、ただし今は宇治にあり」と記されており、この後、秀吉の所有に帰する。森長可は同年四月九日に長久手の戦いで徳川家康軍の急襲にあい死亡している。わずか二十七歳の若さであった。まさに遺言状というにふさわしい。

そして、「天正十六年二月日」と記載されている雲州岩屋寺宛『山上宗二記』には、

沢姫 関白様に取り。
この壺、御茶七斤半入る。なり、どうはり候て一段珍しきなり。うしろにえくぼあり。土、葉ならびに御茶の閑味も申すに及ばず。森武蔵守進上と書かれている。この記述も正しければ、先の遺言状と合わせて、

沢姫大壺は天正十二年から十六年までは秀吉の所有ということになる。

では、佐保姫大壺と沢姫大壺は異なるものであろうか。『宗湛日記』の当該条には、

底ニさは姫と相阿の判有、かなニ、又左の方ニそろて、さはひめと其上ニ能阿の判有と記述されている。つまり、足利將軍家の同朋衆である能阿弥と相阿弥の判が底に押されており、「さはひめ（姫）」と書かれているというのである。

つまり、この『宗湛日記』を書いた人物は、「さはひめ」大壺と佐保姫大壺を同一物と見ているわけである。これはどのようにして起こったことであろうか。実は、『分類草木』に、
沢姫は、大坂徳林所持。壺の底に「さはひめ」と有ると。「さはひめ」なるべきを、ほの字の上の点きえたるをさはとよみ損じたと云々。

と書かれていることを下敷きにして
いると考えられる。この『分類
草人木』は、横井清の『日本の茶
書』(平凡社)の解説によると、

「永祿七年(一五六四)三月に、
和泉堺の茶人、真松斎春溪が筆録
したもので、名物茶器のことや目
利(鑑定)のことについて、ごく
簡潔に解説した茶書であり、一種
の秘伝書である」とされている。

この『分類草人木』は誰が書い
たと記していない。「さはひめ」の
筆者を、『宗湛日記』の筆者は相
阿弥と能阿弥の二人としている。
能阿弥は、応永四年(二三九七)
生まれで文明三年(一四七一)没
の足利將軍家の同朋衆として有名
である。相阿弥は彼の孫である。
共に唐物奉行を勤めたとされ、唐
物の鑑定・管理・座敷飾りなどを
担当したとされている。そして『君
台観左右帳記』や『御飾記』はこ
の両者の著作とされており、茶具
の飾りつけのレジェンドとされた
人物である。つまり、本来誰の字

かわからなかったものを能阿弥・
相阿弥の筆とすることで格付けを
おこなっているわけである。

さらに、『宗湛日記』は当代の
格付けも行っている。「さはひめ
大壺」の紹介文の最後に、

又蓋内の二さはひめと有、是
ハ宗及書付候と也、宇治森所
ニ而也、

と書かれているのである。ここで
は、宗湛を秀吉に紹介してくれた
大恩人である津田宗及が、茶壺の
蓋の裏側に「さはひめ」と書き付
けたとある。そしてその書き付け
た場所を宇治の茶師である森氏の
屋敷としている。

ここでも『宗湛日記』の筆者は
失敗をしているように思われる。
「宇治森」というと茶師の森家を
思い浮かべるが、先ほどの天正十
二年三月二十六日付の尾藤甚右衛
門宛森武蔵守遺言状を思い出して
いただきたい。森長可が「いまは
宇治にあり」と書き記しているこ
とから創作して、「宇治森」と書い

たのではないであろうか。もしそ
うした推測が成り立つならば、宗
及が「さはひめ」と書き付けたと
いうのも創作ということになる。

そもそも、この日の茶会の主人
である木村屋宗二なる人物は何者
であろうか。『角川茶道大事典』
では、泉澄一が木村屋宗意の項で、
生没年不詳、安土桃山の大阪

天満の町衆。佐保姫の大壺を
所持(『天王寺屋会記』(宗及
他会記)。なお『宗湛日記』
の天正十五年(一五八七)十
月二十二日、木村屋宗二が佐
保姫の大壺を見せているが同
一人物であろう。

と書いているが、「宗及他会記」
に登場する木村屋宗意が所持した
のは佐保姫大壺ではない。すべて
「宗及他会記」の記事であるが、
まず天正十一年正月十八日朝の天
王寺屋道叱の茶会に登場した大壺
に「このむらやつぽ也」とあり、
次の説明が記されている。

大壺、二わウトイフ壺也、四

斤半程入ツボ也、壺ノ左方ニ
火口ノイレアリ、コブシゲシ、
チイサキコブアリ、セイタカ
キ壺也、葉ケク、ミタル也、
とある。「仁王」という名称のまっ
たく違う大壺である。

そして、同じ天正十一年正月二
十六日昼に銭屋宗訥の屋敷で沢姫
大壺の拝見会が行われているので
ある。沢姫の所有者は「川なべ右
衛門尉」と記されている。そして
川那部右衛門尉頼廉という本願寺
坊官の所有はすくなくとも天正十
一年九月十六日の秀吉茶会までは
確認できる。そこには、「さハ姫
河辺右衛門尉」と書かれているか
らである。

ちなみに天正十二年十月十日の
大坂城での秀吉茶会に登場する
「棹娘」を佐保姫と考える向きも
あるが、どうして「さおむすめ」
が「さはひめ」になるのか説明が
必要であろう。もつとも森長可遺
言状によれば、天正十二年三月二
十六日以降は、沢姫大壺は秀吉の

所有である。沢姫と棹娘が別の茶壺としても、沢姫の所有が秀吉であることは間違いなからう。

ところで、「宗及他會記」の天正十一年正月二十六日の沢姫大壺の説明文には興味深い文章が記されている。

さわひめ大壺見候、川なべ右衛門尉

大壺ノナリ一段能候、(中略)壺ノソコニさはひめと書タル字有、さは姫と書タリ、ヒメトイフ字ヲモジニカキタル下ニ想阿弥ガ判アリ、サワヒメト二所ニ書タルナリ、判モ二ツアリ、一ツノ判ハ古キ判也、ロクワウインノ御判カ、京極道与判カト見申候、壺ノソコハリテ、ヅシリトキタルヤウニミへ候、

とある。ここに宗及が実際に見た沢姫の感想が書かれている。それによると、壺の底に「さはひめ」と書いたものが二つあり、一つには相阿弥の判が捺してあり、もう

一つの判はさらに古いものだから、足利義満か佐々木導誉の判ではなからうかと推測している。さらに相阿弥の判のそばの「さはひめ」の文字は「さは姫」と姫の字を漢字で書いているとまで記している。

これは先述した『宗湛日記』の記述と合致する部分もある。まず相阿弥の判が一致している。次にもう一つ古い判があり、それは義満か導誉と推測している。しかし判別はできていない。それを『宗湛日記』の筆者は能阿弥としたわけである。そして宗及が沢姫大壺を見たのは堺の錢屋宗訥の屋敷であるが、『宗湛日記』では宗及の蓋裏書きの場所を「宇治森」としている。そして大壺は沢姫と書かれているものを『宗湛日記』は「さはひめ大壺」と書き替えている。以上のことより、『宗湛日記』の当該条は、木村屋宗意という人物から木村屋宗二という人物に変化している。木村屋宗二はここに

しか登場しない人物である。他の史料での確認が必要といえよう。さらに『分類草人木』の記述をもとに、沢姫大壺を佐保姫大壺と同じ物と決めつけている。また「宗及他會記」の記述をもとに、大壺の拝見記を創作し、そこに森長可の遺言状なども加味していると考えられる。

たいへん雑駁な論証であるが、このように『宗湛日記』のある一日の記事でも、詳細に見ていくと、疑問点が湧いてくる。茶の湯史料だけでなく、歴史の史料は追及しても仕切れるものではない。しかし、できるだけ真実に近づけるように真摯な目で史料に向き合うことが必要であろうと思う。

理事会

令和二年度第二回理事会が、三月七日(日)午後二時よりキャンパスプラザ京都で行われた。理事

十六名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、令和三年度総会提出議案について、
 - ・令和二年度事業報告、決算報告
 - ・令和三年度事業案、予算案

- 二、令和三年度総会・大会について

- 三、理事候補者の選出
- 四、会誌・会報について
- 五、その他

第一議題では、総会提出議案について、令和二年度事業報告・決算報告について、各担当理事より報告と説明が行われ、承認された。引き続き令和三年度事業案・予算案が出された。

令和二年度は、コロナウイルス感染症防止により、総会・大会、研究会、各地例会の一部が中止となったことが報告され、令和三年度は開催に向け、Zoom等を取り入れるよう検討していくことと

なった。

研究会は、国内研究会とし、熊本（熊本県立美術館等）を検討中。

会員の退会増加に伴い、収入減少が見込まれる為、支出を抑えていくことが今後の課題とされた。

第二議題では、令和三年度総会・大会について、見学会をなしとし、総会・大会のみを六月六日（日）に東京国立博物館 平成館大講堂で行うことが了承された。

研究発表者及びシンポジウムのテーマ「岡倉天心と明治の茶の湯」の発表者は、今年度の予定を移行することが決定された。

第三議題では、理事候補選出について、池田俊彦理事が令和三年一月九日に逝去され、また複数の理事の退任に伴い、理事推薦候補ならびに幹事推薦候補が選出された。

第四議題では、会誌・会報について、会誌三十五号、会報一〇八号は三月末に発行されることが報告された。

第五議題では、環境省より、日

本の伝統文化や芸能等（茶道・弓道ほか）の道具に使用されている羽を用いた製品についての譲渡や売買、貸し借り等への注意喚起の周知チラシの紹介があった。

今後の理事会は、Zoom開催とすることが提案された。

例会

東京例会

（令和二年十二月十二日）

「福喜多靖之助著 CHANNO-YU TEA CULT OF JAPAN —海外へ伝えられた近代数寄者の茶の湯—」
櫻庭美咲

福喜多靖之助（一八七四—一九四四）による著書*Chan-no-yu Tea Cult of Japan*（一九三二）を紹介する。福喜多は、三井系財閥企業王子製紙社長藤原銀次郎を支えた企業幹部。ハーバード大学大学院修了後在日米国大使館通訳を務

め、米国大使館関係者に強い人脈があった。一九一二年に王子製紙に入社、銀次郎のもと卓越した英語力で海外との交渉役を担い没年まで奉職した。銀次郎は、益田鈍翁、高橋箒庵等と密接に親交し、

茶の湯に傾倒。福喜多も靖庵と号し、三井系数寄者のサークルに身を置いた。銀次郎や鈍翁の茶を知る福喜多自身が、成熟期を迎えた近代数寄者の茶の湯をリアルタイムで海外に伝えた意義は計り知れない。

福喜多は述べる。「茶の湯を超常的で複雑な儀式や式のようなものと捉えるのは誤りであるが、こうした誤解は西欧のみならず日本にも存する。形式でなく、もてなしの心、礼節と平穩こそが茶の湯の基本（中略）寄付・露地、茶室に行き渡る茶境は、客にも亭主にも人生の卑俗な現実から一時離脱せしめ得るような心持を起こさしめる。愉しみは哲学的分析や科学的な根拠を要するものではない。

（拙訳）。福喜多の言説は、風流と芸術鑑賞に重きを置く「茶の湯」の純粋性の価値を主張した箒庵の姿勢に呼応する。

また本書は、茶人の見識に基づき、入念に用語が吟味された最初の英文茶書でもある。岡倉天心の『茶の本』における“*teasum*”という用語の解釈の再考をうながす福喜多の問題提起も極めて傾聴に値する。

「古田織部と連歌 —近衛信尹との両吟百韻を中心に—」
工藤隆彰

古田織部は、千利休の没後を領導した茶人として知られているが、晩年は当時の主要な連歌作者の一人でもあった。その活動の一端である、近衛信尹との両吟百韻は、度々紹介されているにもかかわらず詳細な考証が行われてこなかった。

信尹との両吟百韻の全体を示す資料は、現在成田山書道美術館に

所蔵されている伝本が唯一のものである。脇句を含む五十句の作者には「杉」、つまり信尹の一字名が記されており、巻頭の「慶長十九年五月九日 賦青何連歌」の題から句上に至るまで、能書として名高い信尹を祖とする三藐院流の書風を以てしたためられている。

そのため、件の伝本は両吟百韻の作者の一方である、信尹自らが筆を揮ったものと考えられてきた。

しかし、織部の名の表記に疑問があり、実際は信尹を敬慕してその書風を得意としつつも、織部については詳しい情報を持たなかった別人による写本であった可能性が考えられる。

他方、件の伝本が示す慶長十九年五月九日青何百韻が行われたこと自体は、織部の書状からも確認できる。慶長十九年五月九日青何百韻は、織部が加わった両吟、また同年における信尹との一座としても、作品の全体が把握し得る現在唯一のものである。さらに、織

部が発句を詠んだ張行としては、確認できるなかで最も時期が早い。織部の連歌に関わる活動のなかで殊に重要なものであることは間違いない。件の伝本の価値は信尹自筆か否かを問わず、やはり非常に高いと言える。

近畿例会

(令和三年三月十三日)

「陸奥八戸藩の古田織部流について」

廣田吉崇

青森県八戸市立図書館には陸奥八戸藩の茶書がいくつか所蔵されている。すでに発表者は、『茶書研究』第七号、平成三〇年に有楽流の茶書『亭主振の巻』『客振の巻』、同じく『茶書研究』第九号、令和二年に『古田織部流八十一ヶ条口伝抄』の翻刻および解題を掲載する機会を得た。とくに後者は『古田織部流』と銘打たれており興味深い。著者である鶴飼治右衛門詮常(貞享三年(一六八六))

宝曆二年(一七五三)は、同書

い。

を延享二年(一七四五)八月に藩主南部信興に献じたが、同年七月に『茶湯秘伝口決抄』を著わし同じ藩主に献じている。本発表ではこの2つの茶書について比較検討することにより、この『古田織部流』について考察した。『茶湯秘伝口決抄』には流派名がみられないものの、古田織部↓片桐石見↓高橋道竹↓鶴飼治右衛門という系譜が示されている。しかし、この伝来は疑わしい。「古田織部伝茶湯聞書」と題された部分には茶書の版行に関する記述があり、版本茶書が盛んになる江戸中期以降の状況を踏まえたものと考えられる。内容を分析すると、『風炉濃茶一杓の水』をめぐり、上巻と下巻とは記述に矛盾がある。また、七という数字に基づいて整然とした体系を構想しているが、点前の格により七段階を構成するような点前の体系ではなく、便宜的に七種の点前を集めたという印象が強

八戸において一時期古田織部流

がおこなわれていたとしても、後世の茶人、おそらくは鶴飼治右衛門が『古田織部流』を自称したにすぎないと消極的に評価すべきものであろう。しかしながら、鶴飼治右衛門の教えはその後八戸藩士の間にも広まった歴史がある。それは『古田織部流』ではなく、『高橋流』または『道竹流』と称されていた。これらの資料は、別の機会に検討することとし、八戸藩の茶の湯について、さらにあきらかにしていきたい。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。

東京例会

令和三年九月二十五日(土)

午後二時～

(Zoom開催)

会場：未定

「押入・押入床について(仮)」

高知例会

令和三年九月五日(日)

新刊案内

「大聖寺藩主前田利豊の茶」
依田徹

山岸多加乃
「渡辺又日庵とその周辺の茶の湯」

午前十時～正午
会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

「兼見卿記」に見る茶の湯(仮)

水野荘平

岡倉天心『茶の本』第六章輪読

『百万人の茶道コーチング講座心のつうじる稽古のために』
岡本浩一著 淡交社

中村修也

東海例会

(各自お持ちの本をご持参ください)

令和三年十月二十三日(土)

午後二時～三時半(開場午後一時半)

令和三年十二月十二日(日)

『茶人のたしなみ 和歌・俳句に学ぶ11人の「文遊び」』

会場：未定

令和三年九月十一日(土)

午前十時～正午

石塚修著 淡交社

「益田克徳の茶とその周辺―その二」

「名古屋ゆかりの古筆と古筆切について」

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

神保乃倫子・八木京子

四辻秀紀

岡倉天心『茶の本』第七章輪読

定価一、四三〇円

「樂長人の創意について」

今井敦

茶事 正午～午後四時

席主 四名

今井敦

令和三年十一月六日(土)

会費 五千円(参会希望者は予め連絡をして下さい)

お知らせ

令和三年十二月四日(土)

加藤忠三郎

令和四年二月六日(日)

令和三年度

午後二時～

北陸例会

令和四年二月六日(日)

総会・大会 延期のお知らせ

会場：未定

令和三年九月十八日(土)

午前十時～正午

※六月六日の総会・大会は延期になりました。

「未定」

「未定」

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

日程等が決まりましたら、改めてお知らせいたします。

下村奈穂子

「未定」

高知支部二〇二二年度事業計画

※すでにお振り込みいただきました参加費は、そのまま有効とさせていただきます。

「未定」

令和四年三月十二日(土)

高知支部二〇二二年度事業計画

谷村玲子

「未定」

高知支部二〇二二年度事業計画

令和四年三月十三日(日)

「未定」

高知支部二〇二二年度事業計画

令和四年三月十三日(日)

「未定」

高知支部二〇二二年度事業計画